

園だより

No.4

R4.6.3

大沢幼稚園園長 長友 六月

TEL (762) 4389 (代)

FAX (762) 4386

<http://www.ohsawa.ednet.jp/>

緊急連絡先 090-3693-9673

この地域で昔から田植えをする頃（6月の第2週）。入梅を迎えるこの時期は、そろそろ、安心して園での生活を過ごせるようになってくる頃です。そして、今一度、一人ひとりの子どもが、「何をして遊んでいるのかな。誰と遊んでいるのかな。何に興味を持っているのかな」ダンゴムシやカタツムリを探して葉っぱや人工芝をひっくり返し、アリやミミズを見つける子。そこら中の土をひっくり返し、そして、仲間と泥だんごを夢中になって作っている子。おままごとごっこをする子。遊ぶ姿から、子どもたちの心の中も理解する大事な時期にきました。

教職員のお知らせ

○バス添乗の山下愛絵さんが、5月で退職となりました。

今後は、アトリエリスタ（美術担当）や課外の絵画教室の先生として活動していただきます。

代わりの添乗員として、曾根美津子さんが6月より添乗しています。

○令和2年度にゆり組担任をしていた、佐瀬明美先生が6月より復職いたしました。

全体のフリー教諭ですが、英語が堪能でもあるので、幼児クラスの英語教育の強化をしていきます。

以下の文は、環境新聞から抜粋したものです。読んでいただけたらと思います。

環境意識を育む教育「森の幼稚園」

森で子育て

デンマークのスコヴァーネヘンと呼ばれている「森の幼稚園」の施設には、日本のようにクラスごとの部屋などはなく、備え付けの遊具もない。子どもたちは毎日森の中で過ごし、四季による森の変化に想像力を育み、自然の中で遊び方を考えて自由に遊ぶ。よほどの悪天候でない限り、雨や雪の日はもちろん、気温がマイナスを示す一月の寒い冬の時期でも、毎日森の中で遊んで過ごすことが基本となっている。

「森の幼稚園」はある女性の子育てから始まった。

今から60年ほど前、当時デンマークでは幼稚園が不足しており、母親である彼女は自分の子どもの保育のために、子どもたちを森に連れて行き遊んでいたところ、近所の人々も自然の中で保育する彼女の教育方針に賛同し、ヨーロッパで初めての自主運営による「森の幼稚園」を開園させた。その後、通園を希望する児童や社会からの反響が多く寄せられたため、「森の幼稚園」は自治体はその運営を引き取り、公立幼稚園となり彼女は自治体職員として運営に携わっている。

育つガマン強さ

「森の幼稚園」では、先生は子どもの遊びに干渉せず、見守っている。それは、大人が遊び方を提供してしまうと、子どもの豊かな想像力を広げることができないため。そして、先生は子どもたちが自身で物事を行うことを促し、子どもたちがやり遂げることのできるだけの時間を十分に与える。森へ出かけるための準備なども子どもたちは自分で行き、先生の手を借りることはない。多くの子どもたちは、泣き出したりだだをこねたりということはなく、笑いながら困難を楽しんでいるようだ。さらに、子どもたちは自然の中で遊ぶことで、危ないこと、やってはいけないことなど、さまざまなことを経験し学ぶ。それに気がつくことを先生たちは見守りながら待つ。

「森の幼稚園」の訪問者が特に驚くことは、子どもたちの忍耐強さと大人たちの辛抱強さだ。

子どもたちは、森の中の不便な道のりさえ、自分の力で乗り越え、先生はその姿に手を差し伸べたくなる気持ちを抑えて辛抱強く見守る。保護者はいずれも、この保育方法を信頼し、子どものケガなどに対しても理解を示している。

森とのふれあい

そしてこの保育方法で育てられた子どもは、落ち着きのない行動をとるような精神状態になりにくいとされ、健全な精神育成の方策としても期待されている。幼いころの自然へのふれあいや森での動植物を思いやる日々は、身体能力やコミュニケーション能力、創造力を養うことが可能だ。

(以上 環境新聞から)

この記事はデンマークやヨーロッパで広がる子育て方法で、日本の子ども達を取り囲む社会（仕組みを含めて）の中では、現実問題、難しいところです。その中で、自然とどのように関わるか、その環境を整えるかを考えます。自然と関わる方法は、大きく二つの方法があります。ひとつは、子ども達を自然の中へ連れて行くこと。もうひとつは、自然を子ども達のところへ持ってくる。園外保育、サマーキャンプ、お散歩にでかけることはもちろんです。そして、ヤギやカメ、植物に集まる昆虫などの虫たちも可愛がり、園舎の中にもその季節の花や装飾を持ってくること全てが、子ども達と自然との関わりと考えます。

もうひとつは、記事の中の「子どもたちの忍耐強さと大人たちの辛抱強さ」この言葉は大沢の「待ちの保育」とも共通するところです。大人が何かを教えること以上に、子どもどうしの関わりの中で学ぶことが多いことは、皆さんも承知の通りです。園においては、“生活を創るのは子ども達”という考えのもとで我々教職員は過ごしています。家庭においても、同じであると思います。大人が手を出す、口を出す方が時間はかかりません。後の手間も省けますが、ひとつひとつが子どもにとっての学び（生活を広げる）であると思います。同時に大人（親）にとっての学びでもあると考えます。